



▲湖の春の色  
スイスのユリー湖の東にアルプスの山脈にあり、長さ約五十キロ幅約二十キロの湖がある。湖の周囲は高き山脈に囲まれ、湖の水は非常に清く、湖の周囲には多くの木々が生え、湖の周囲には多くの山小屋がある。湖の周囲には多くの山小屋がある。

び案内人等の委員によつて實地について嚴格に行はれる。この試験を通  
過すると、初めて第二級の案内人の資格を許される。案内人には監督官  
廳より案内人手帖を與へられ、この手帖には登山者が自由に自分の経験  
感想等を書き入れる。季末にはこの手帖によつて、不都合の有無を検査  
される。アルプス登山の初期の著名な案内人と、現在の案内人とを比較  
して見ても、その能力においてもまた経験においても、優るとも決して  
劣るやうなことはないのである。

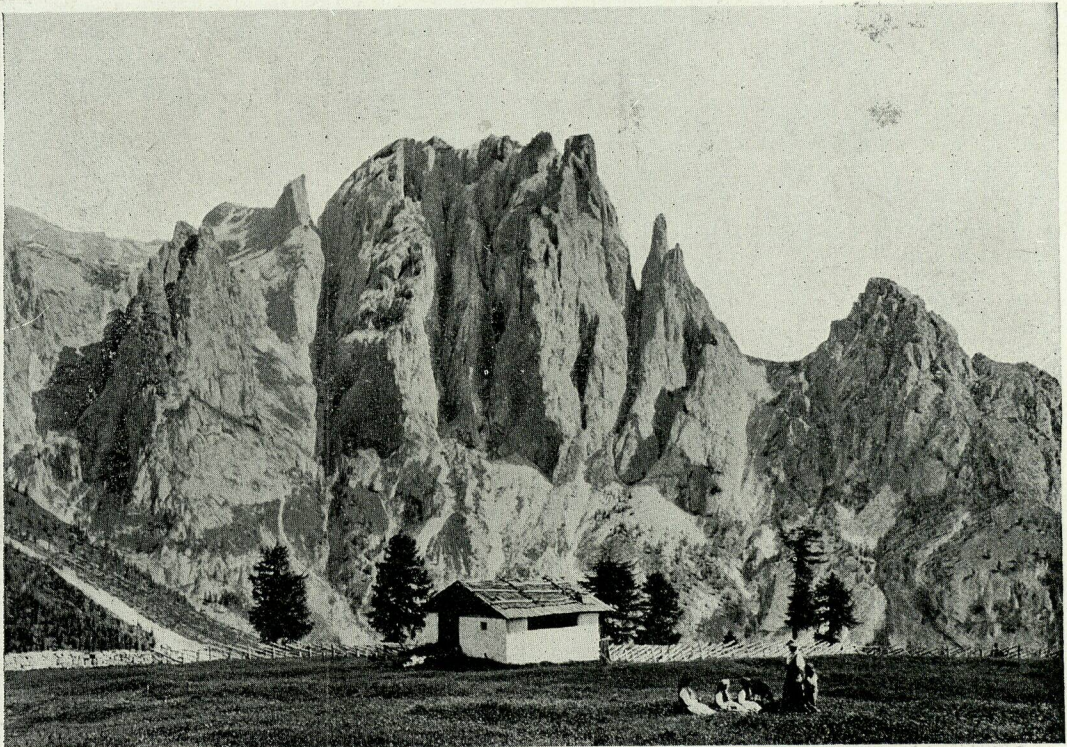
(横有恒)



岩に岩  
つがとち頭張大つき岩を攀る人るの間き小き  
！りな快、あ、い近ものるれば叫が快してし服征を岩拒うもが、よ事

ビシヨフ、ゲルチ等、ポイントレシナにガスバード等あり、何れもアルプス  
の黄金時代に遭過して、赫赫たる不滅の功績を残してゐる連中である。  
最近の案内人は、次ぎのやうな訓練を経ねばならない。十八歳にし  
て漸く荷背負たることを得て、この荷背負を勤めてゐる間は、登山者ま  
たは案内人の下に荷運びその傍ら登山を修得して二十歳になるとやうや  
案内人たる資格試験の受験資格を得る。試験は監督官廳、山岳會及





は立壁の峯群るた々峻。るあでの的の懐憶の家山登そこスプルアむ包を祕神の多幾と美の統傳りよ昔の古千 姿雄のスプルアるな烈壯

## アルプス登山

### 山の魅惑

永遠の峰、氷と雪の聖域——初めてアルプスを仰いだ人々は、詩人でもなくとも、畫家でもなくとも、また思索家、哲學者でもなくとも、誰しもその壯嚴雄大な景觀に、一種の神祕な感に打たれないではゐられない。嘗てジョン・ラスキンは、その少年時代にその両親に伴はれて、スウイスのシヤハウゼンといふ、ラインの上流に臨んだ一都會に滞在したことがある。そしてかれはしばしば河畔の丘にたたずんで、遙か天の一方に聳えたアルプスの壯嚴な山影を仰ぎ、あの有名な、そして艶麗な章句を遺してゐる。

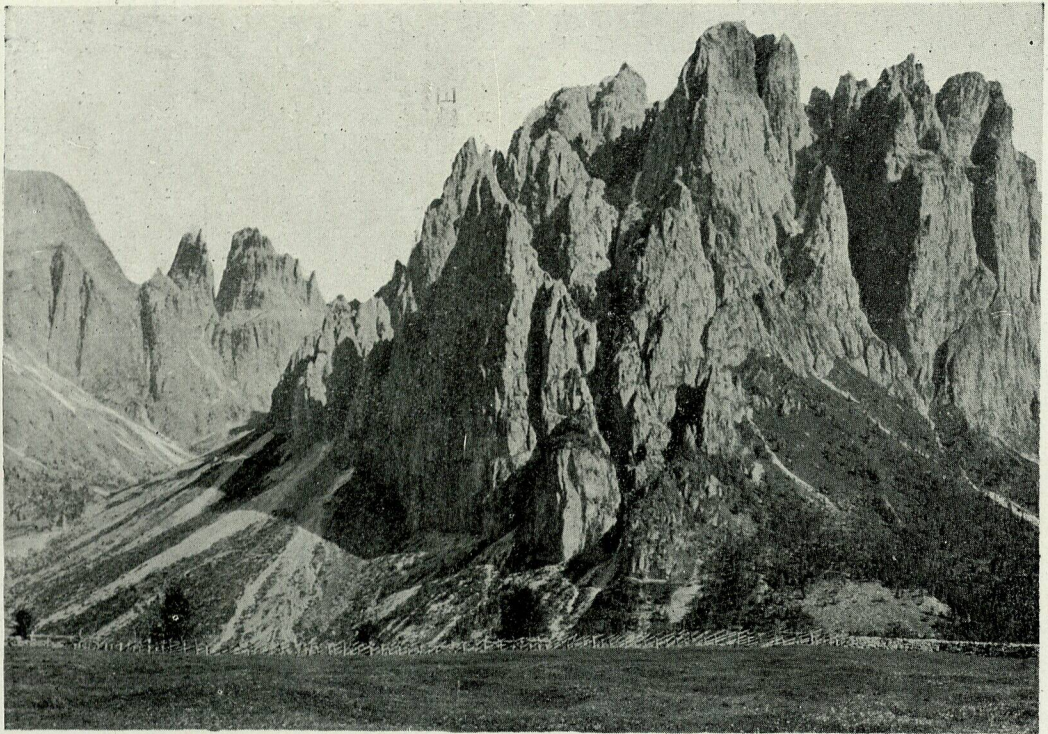
「私達は、樹間の散歩を樂しむためには、しばしば夕陽に長い影を曳く街中を通つて、西の方ラインの河谷を抜く高い丘の上に出かけた——そこは、南と西に、波打つ平野がつらなり、私達はその渺茫たる眼路のかぎりを望んで、無心にたたずんでゐた。突然——見よ、遙か彼方にあつて！ 瞬間私はまつたくこの世にありとは思はれぬものの姿を見た。それは水のやうに澄んだスカイ・ラインの上に、鋭く、水晶の如く透明に凝雲の塊のやうな物體が、今しも沈む斜陽にばら色に縁どられて、空中に浮んでゐた。それこそは無限のかなた——かつて夢想した失はれたエデンの園も、または天国にありといふ不滅の聖域も、かくも麗はしく、かつ壯嚴ではあり得ないと思はれた。」

ラスキンは、少年時代に深く印象づけられたこのアルプスの感銘により、後年あの「近世畫家」全五巻の大作を完成したのであつた。

### 日本人に縁故の深い山々

アルプス登山の史的懐古は別として、スウイスのクライミング・センタ





るあで題畫大雄の家術美と人詩は烟花おの麓と肌山の色褐赤。るあもで料資究研の者學實地は歴史の蝕侵化風で晶結の造構たし雜複の々種

一（**登山中心**）と呼ばれるものが二箇所ある。一つはグリンデルワルトで、フィンスター・アルホルン（四、二七五メートル）、を盟主としてユングフラウ（四、一六六メートル）、メンヒ（四、一〇五メートル）、アイガー（三、九七五メートル）、シュレックホルン（四、〇八〇メートル）、ヴェンターホルン（三、七〇三メートル）などの峻峰が、氷河を貫いてそり立つてゐる、ベルニス・オーバーランドの根拠地である。

こゝは、日本の登山家とはかなり縁の深い山村で、一九二六年の春と夏には秩父宮殿下が登山遊ばされたほか、嘗て横有恒氏が初登攀したアイガーの東尾根が、一千メートル餘の斷崖を見せて、谷の眞上に屏風でも引き廻したやうに聳えてゐる。そしてこの山稜の下方、ミッテルレギ！からウンター・グリンデルワルト氷河間の半分は、つい先年、松方、浦松の兩氏が初めて通過したもので、共に日本の登山家が、世界的に名聲を馳せた縁故を結んだのも不思議である。

更に、このグリンデルワルトの谷に向つて、直接裾を引きめぐらしてゐる峻峰に、ヴェンターホルンがある。その西南稜は未踏の尾根筋として久しくアルピニストの食指をそゝつてゐるが、これまた一九二八年の夏に浦松佐美太郎氏が初登攀を行つてゐる。

そのほか、ユングフラウの登山鐵道の間驛であるアル（ル）の巨豪は、わが同胞としてアルプスに正統な登山を行ふ目的で踏み込んだ最初の登山家である、故辻村伊作および近藤茂吉の兩氏が登頂の後、下降に際して崩雪に襲はれた、アルバイン・アクシデントの物語を秘めてゐる。



ざわれ難 硝子張の窓か  
路の假千ばせ下見 たりたわ頭岩たつ立れく、き

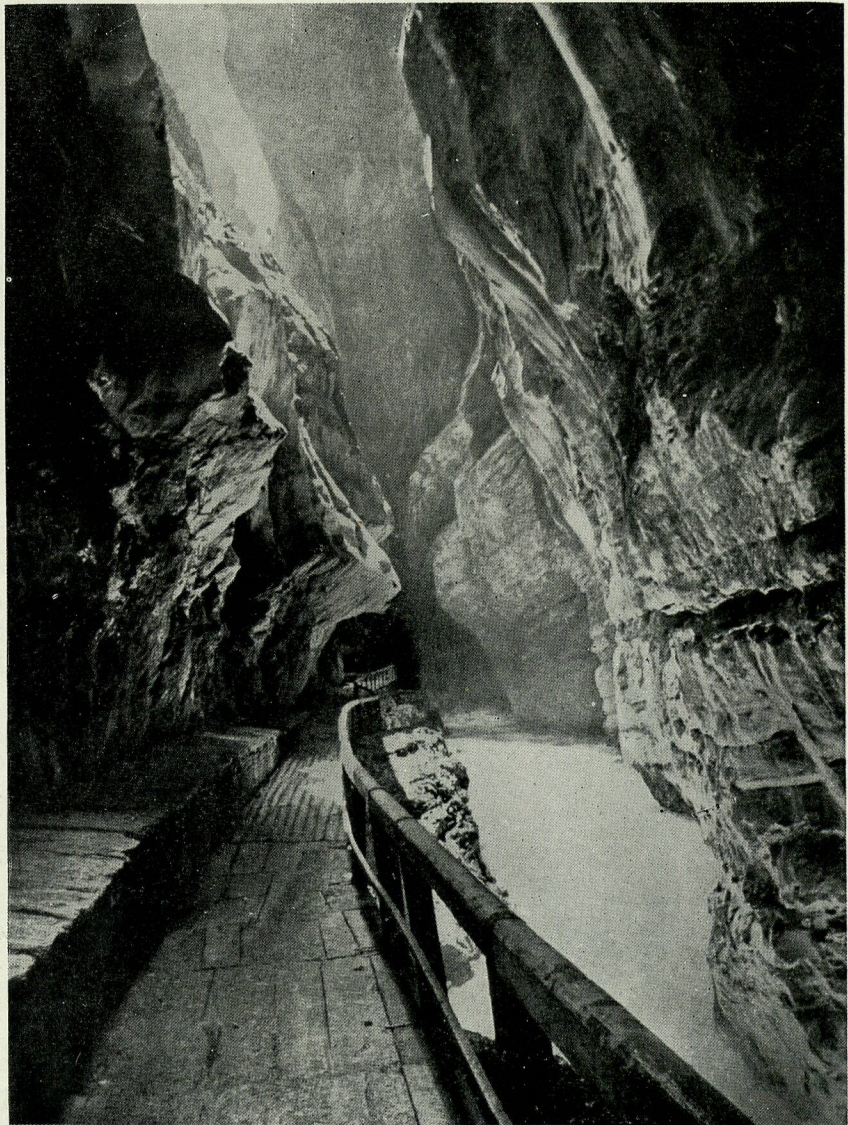
イスメーヤの硝子張の窓から、正面に仰がれるグロス・シュレックホルン（四、〇八〇メートル）



## 氷河上の夏、スキー大會

スウイス旅行を企てる人々——といふよりは、ヨーロッパに來た旅行者の誰もが訪れるユングフラウ・ヨッホは標高三、三三四メートルで、鐵道驛としてヨーロッパ中で最高地點を占めてゐる。そこはインターラーケンから、ラウターブルンネンまたはグリンデルワルトを経て、クライネ・シャイデックと呼ぶ峠で再び出會ひ、有名な登山鐵道に乗替へ、アイガー氷河、アイスメーヤの停車場を経て達せられる。

大トンネルの終端がヨッホの驛で、そこにはベルグ・ハウスと呼んでゐる、それこそ世界最高の地位を占めた立派なホテルがある。厚い二重のガラス窓を透して、眼の下に展開する、アレッチ氷河の壯觀は何にたとへよう。しかも新雪に掩はれたユング



フラウ・フィルンの上では眞夏だといふのにスキー大會が催され、長距離

掠める。

ユングフラウ・ヨッホから、コンコルディア・プラッツと呼んでゐる氷海までは、季節を度外視して、靜穩な日であれば理想的な氷河スキーのコースである。更にコンコルディアからグリウンホルン・リュッケと呼んでゐる氷河の峠を越して、ベルニス・オーバーランドの王座と呼ばれるフィンスター・アルホルン(四、二七五メートル)の頂上を極めるのは、スキ

。るあで潭激いか短くごは川ナミタるす合に河ンイラで下のツガラ縣ルガトンセのスイス 峽ナミタ  
。つ一のそもれこい多がることすなを勝奇てしなを映しなを淵々時て多く山岩く清水は線沿のそしかし







一登山として最も壯觀なブランである。ヨッホを根據地とするならば、ユングフラウの登頂は、ガイドさへ備へばさして難行ではなく、メンヒの東尾根の岩登りも愉快な半日の登行である。

は、茂つた森林で麓を刺繍した丘陵をめぐらし、その上部には緑の牧草地——すなはちアルプと呼ぶもの——が、ゆたかな臥牛の背を思はせるやうなスロープを起伏せしめ、その頂點の一つをファウルホルン（二、



近附トルアウルデンリク  
ンルホ、クッレシュ、ンルホータエグめ始をンルホルアータスニフ  
。ルプアーケのンルホータエフは圖。所るあの地濃畏のドンランパーオ等クラフグンユ、ーグイア・ヒンメ

六八三メートル）と呼んでゐる。グリーンデルワルトからは一日で、氣の張らない山旅気分が往復ができる。途中には繪葉書などでお馴染みのバツハ・ゼーがあり、エメラルドを溶かしたやうな湖心にヴタターホルン、シユレックホルン遠くは頭を少し傾けたフィンスタター・アルホルンなどの氷と岩の峻嶒が逆さに投影し、そして湖と残雪に連る緑のアルプには、牛や羊群の頸鈴がひびくといふ情景である。それは標高からいつても、また山貌からいつても、恰度日本アルプスに相當するものであらう。頂上にはホテルがあり、ベルニース・オーバーランドの氷雪の連嶺を展望するに適し、西の方脚下には、ツーン、ブリエンツの二大湖が擴がり、遙遠くにはルツェルン、ツークの湖が山波の間に碧の暈を覗かせてゐる。

### エンゲルホルナーの岩登り

グリーンデルワルトの東南にはアイガー、メッテンベルグ、ヴラターホルンなどの岩壁が、氷河を劈いて削り立つてゐるが、谷を隔てた向ふ側に

行けるが、グリーンデルワルトの谷を溯り、ヴラターホルンの岩壁中の岩登り場として知られた、ピーホルンの一突起を右に眺めながら、落葉松の疎林を縫うて爪先上りの坂路を辿ると、やがてグロッセ・シャイデックと呼ぶ峠の頂上に達する。そこはグリーンデルワルトとマイリンゲンの谷



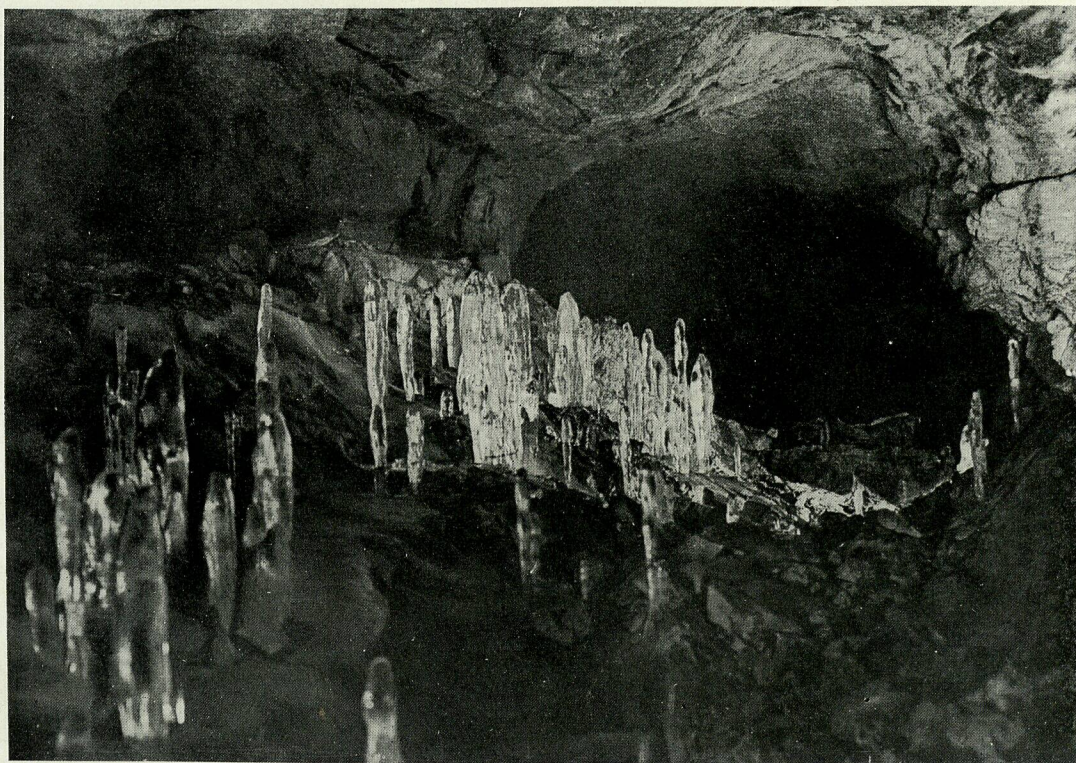




とを區劃する分水嶺になつてをり、峠を北に越して下るとローゼンラウイ温泉がある。

この温泉を根據地としてまたは山中のオクゼンターにあるベルン大學の山岳會が建てた、エンゲルベルグ・ヒュッテに泊り込んで、スウイス・ドロミテンの別稱ある、附近の石灰質の峻峰にロック・クライミング（岩登り）を試みるのは、また格別の味がある。そこにはグロッセ・ジムメルストック（二四八九メートル）キンググシュビッツ（二、六二八メートル）グロッセ・エンゲルホルン（二、七八五メートル）などの、怪奇な鋭峰が聳立してゐる。そしてこの登攀には鉞靴は脱ぐべしで、その代りスカルペティまたはクレッター・シューエで通つてゐる、麻底靴に穿き替へられる。

氷と雪の登攀に飽きた登



氷の立林 中山スプアに所々氷水が滴る。深き洞窟の中、氷柱の間に光る。氷柱の間に光る。氷柱の間に光る。氷柱の間に光る。

山家にとつて、そしてまた秋閑けて高い峰々が登攀を拒むやうなコンデイションの場合でも、ここばかりは岩登り家にとつての樂園を提供する。しかもコースの選び方によつて、一流のクライマーにとつても相當手硬い登路があり、スムーズな一枚岩や、懸垂でなければ降りることの不可能な峭壁や、オヴァーハンダの難場などもある。

### シュレックホルンの横断

シュレックホルン（四、〇八〇メートル）は、高さにおいてはフィンスター・アルホルンやユングフラウはもとよりメンヒにも及ばないが、登攀の困難と危険の點では、その字義が示してゐる通り「恐怖の峰」として、ベルニス・オーバーランドの山々は素より、數ある全アルプスの峻峰中でも知られた峻難の一つである。

ウンター・グリンデルワルト氷河を溯つて、約六時間の行程で、オーバー・アイスメーヤの右岸に新しく建てられた、ストラーレエッグ・ヒュッテと呼ぶS・A・Cの登山小屋に達する。それはシュレックホルンの裾をからんだ堆石の丘のやうに盛り上つたガラ場に建てられたもので、氷海を隔てて上手にはフィンスター・アルホ







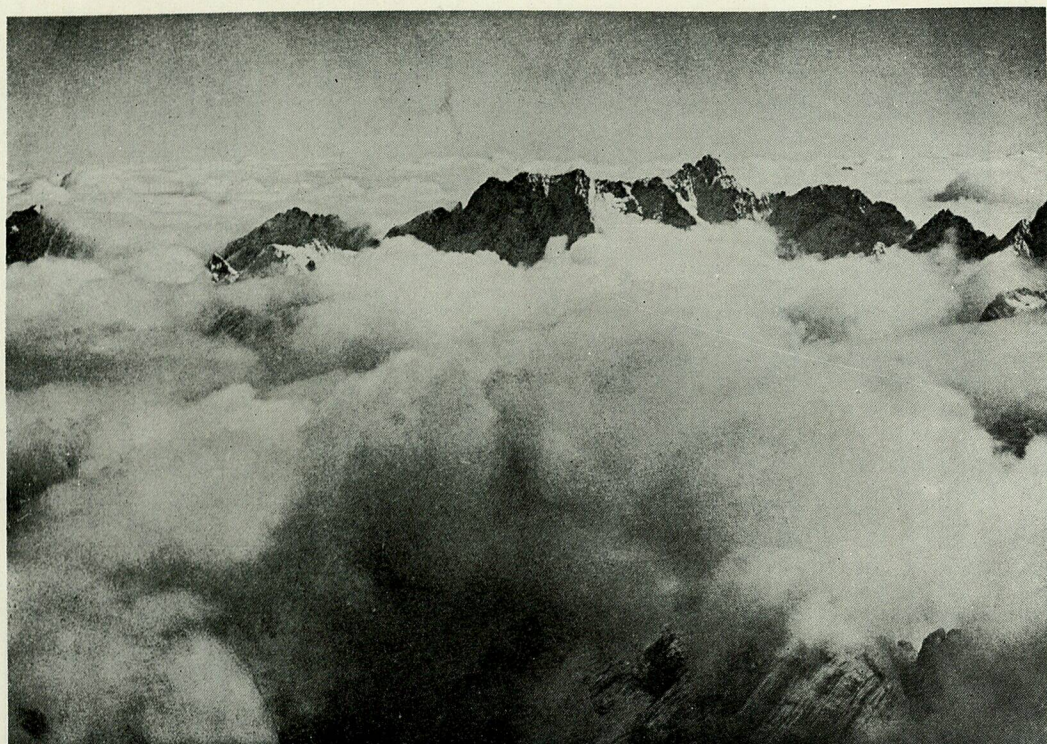


寫のこ。ルトーメ六六一四はさ高の山のこ。たい書々屋もに前はとこのウラフグンユ山名一のスプルア **ウラフグンユく戴を雪新**  
。かいなはでるぜは想をひはけの性女いし々瑞くし優もにかいは姿の峯くゞたいを雪新。るあで姿優の峯同た見らか方の西北のヒンメは眞



関に間の峯尖のを。姿雄のムロトスバルオシと（ルトーメー四八二高標）エツピスィデカの中脈山ヤィテバルカ **エツピスィデカ**  
。るあでることな名有に的界世でのる出く多が鹽岩は方地シロマルマのヤリガンハるあてつなに側對反の山のこ。よ見を光い鏡的な象印の雪白く





ツェヴをこの峰尖三のこ。たべ述にですはとこるみてれ分につ三が嶺山のニイタスータツェヴ **峰尖三のニイタスータツェヴ**  
 いし美は姿のそぶ深に色紫濃たなかの海の雲。ろことだん望らかニツツビスプリアを峰尖門三のをは真寫。ふいと峰尖門三のニイタスータ

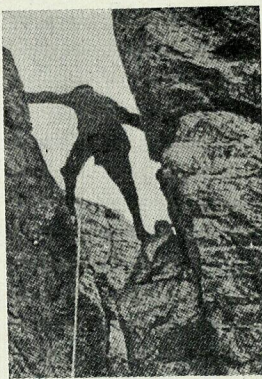


高の二第スプリア。ルトーメ八三六四に寶高標は山のこ。姿るた々楚のザーロ・テンモるめ占を座とりしつどに上の河氷火 **ザーロ・テンモ**  
 るあで觀大のらか面方湖ツルワユシ（ルトーメ一三九二）ンルホルエフリと（ルトーメ八三五四）ムカスリは峯二るゆ盤に右左。るあで山



ルンのピラミッド型の岩塔が聳え、それが尾根づたひにフギ・ザッテルからアガツシホルンに連り、更にクライネ・フィシャーホルンを起し、眼前には龜裂の多いアイス・フォールが、一氣に山稜から氷海に向つて逆おとしに躍り込んでゐる。

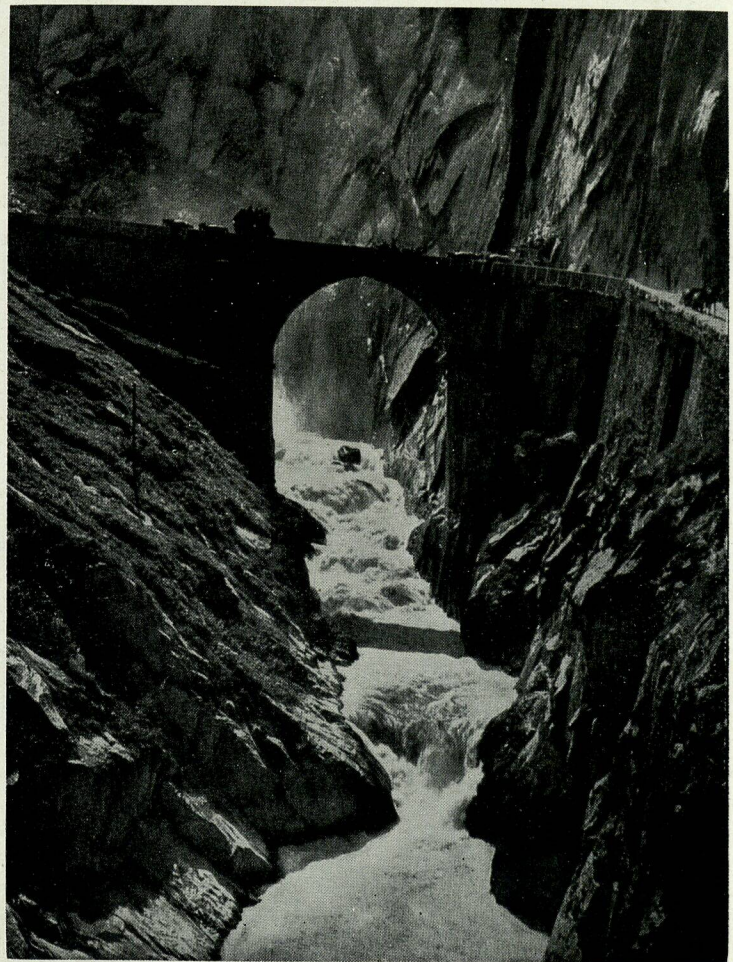
小屋に著いたパーティは、大樹目が暮れ切らない宵の内に、二階の藁床に潜込む習慣になつてゐる。それは、かうした落石や崩雪の出る習性のあるピークに攀るためには、もつとも危険率の少い時刻――すなはち黎明前の最も氣温の降つた時刻を選んで出發し、氷の絶壁とかクローアルなどの難場は、是非とも朝の太陽の光りが射さない以前に、通過してしまはねばならぬからである。ストラールエッグからは、ガグと呼んでゐる岩壁を右手に、しばしば新雪に被はれた急な氷の壁を攀ぢるので、時にはベルグシユルンドと稱する大きな氷の裂目を乗り越えたりまたは雪壁の中から龜が甲羅を乾してゐるやうに頭を出した岩場をからんで、攀らなければならぬ。小



岩壁を登る者  
見事な突破  
岩を登る者  
見事な突破

屋を出るのは大概真夜中の二時か三時頃で、最初はカンテラの灯影で脚もとを照らしながら攀ぢるのであるが、手袋を二重に嵌めてゐてもどうかすると、指先が感覚を失ふぐらゐるの寒さである。かくて五時間か六時間の

後には、シユレックホルンとラウター・アルホルンとを繋ぐ、山稜中の鞍部ンレック・ザッテルに着くことができる。そして一行は定つたやうに、



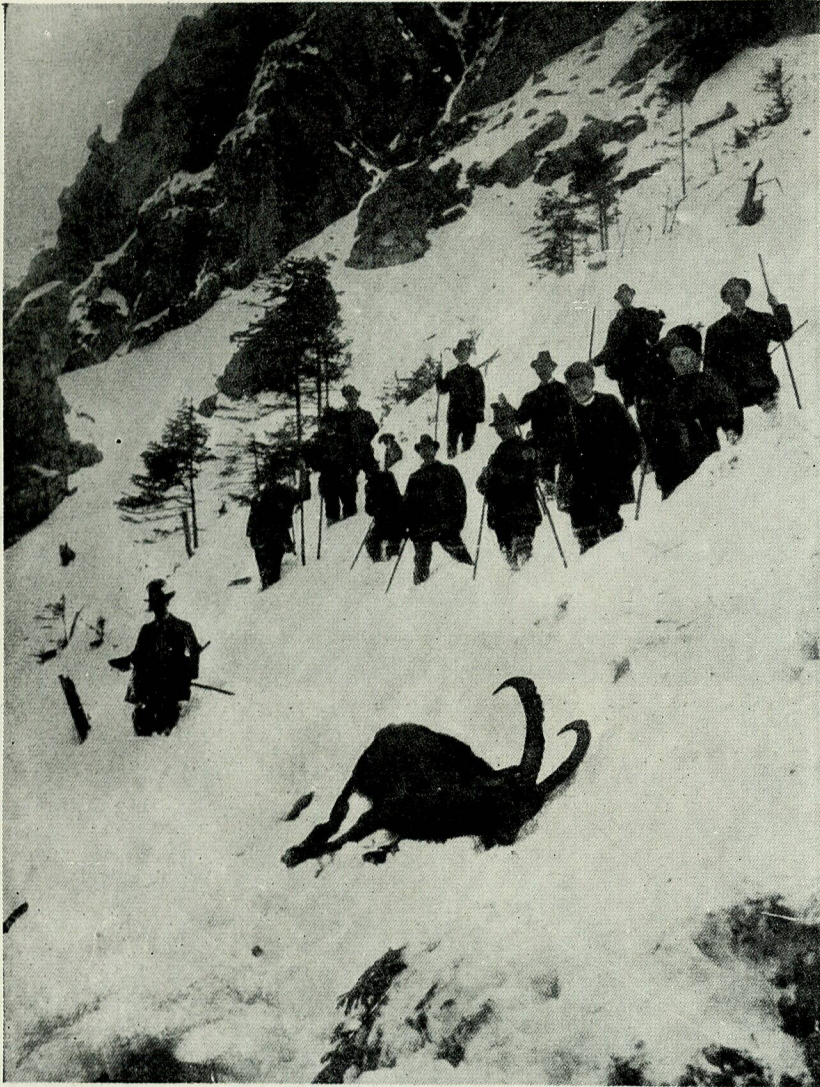
橋の魔悪  
西のシルベ都首のスイウス  
湖ルテヤシーユニルにイラシにアグルー  
河に怪岩が峡流が有る色景が面白  
。のるれば呼と橋の魔悪る架に河同は眞窟。白面が色景ら有が流峡が岩怪な怪奇はに河

この鞍部で朝食を執る習慣になつてゐる。この鞍部も時によつて雪庇を懸け出してゐるから、細心の注意が必要である。ザッテルから頂上への尾根傳ひは、小さい塔状のロック・ニードルやピナクルを絡む氣持のよい岩登りで、岩の陰やら裳に薄い氷が張つてゐない限り、約一時間か一時間半で、雪に被はれたドーム状の頂上に立つことができる。

頂上におけるパノラマ景観

シユレックホルンの頂上における雄大なるアルプスの展望については、





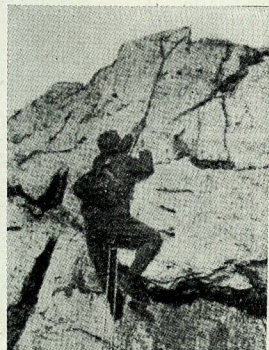
美事射落し獲物 雪山に被たれば山腹を追ひつめども天界氣息は一行の者服征々たくし寂もにればあはまさるれば横に中の雪白にえだえ絶あ息

嘗て同峰の初登攀者であるレスリー・ステューブン氏が、その著「ヨーロッパの會遊地」の中に名文をもつて叙述してゐる。

「巨大なるオーバーランドの峰々——フィンスター・アルホルン、ユングフラウ、メンヒ、アイガー及びヴェッターホルン——は、荒寥たる雪の荒野を横切り、峻しい岩のしめ面を見せて物凄く環状にめぐり聳えてゐる。

る。そして脚下なる「默せる雪の壑域」からは、巨きな濕々した氷柱かと思はれるグリーンデルワルト氷河が、曠漠たる貯水槽に比しては些々たる塊状ではあるが、はるかに耕作された地域の中にまで、給水を導いてゐる。

われは、今、見渡すかぎり荒



岩を攀ぢる美事 引に事 映のり登 岩るち攀にプーロカ

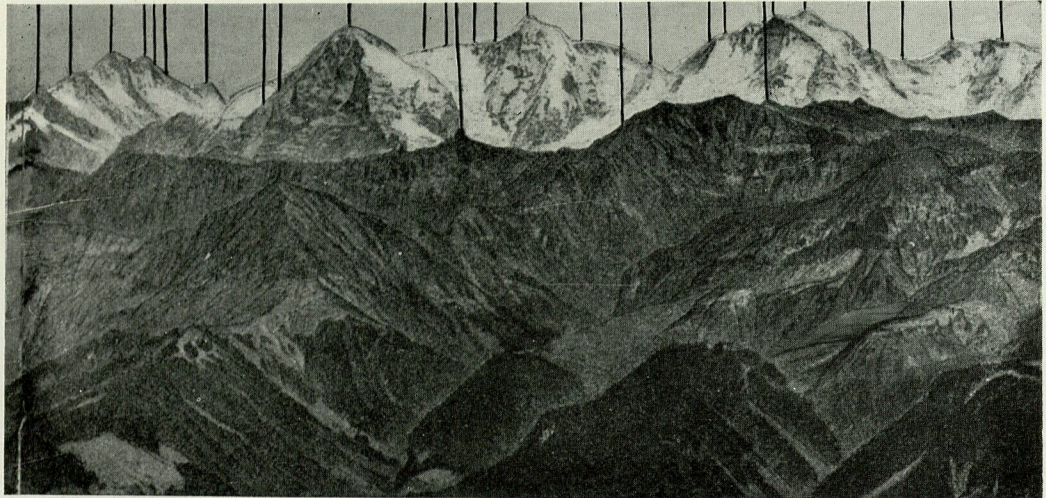
寥たる領域のまつ只中に立つてゐる。それこそはグリーンランドの風景か、さもなければ何物も阻むことのできない底力ある灣流が、未だその海岸を訪れなかつた氷河時代の英國の、想像畫を偲ばせるものがあつた。そして、かかる景觀の魅力——それは殆ど繪畫的と稱する普通の鑑賞の標準を絶し、懷疑者に對しては容易に解説し得られないまでも、私にとつては實に比類なき貴い嗜好であつた。それらは緩かにして嚴肅なる音楽がもつある種の眞の力、もしくはド・クインシーによつて説かれた奇怪なる阿片喫煙者の夢にも似たる誘惑を催す。そしてかれをして靜寂なるカムバーランドの山々を放する代りに、郵便馬車を驅つてアルプスの峠路を迎らしめんとすれば、かれは「夢の







3497 (シユレックホルン) 2345 (シユレックホルン) 4080 (シユレックホルン) 4030 (シユレックホルン) 2523 (シユレックホルン) 2475 (シユレックホルン) 2222 (シユレックホルン) 3975 (シユレックホルン) 1880 (シユレックホルン) 2570 (シユレックホルン) 4275 (シユレックホルン) 4105 (シユレックホルン) 3833 (シユレックホルン) 2727 (シユレックホルン) 3415 (シユレックホルン) 2785 (シユレックホルン) 2776 (シユレックホルン) 3705 (シユレックホルン) 4166 (シユレックホルン) 3946 (シユレックホルン) 3982 (シユレックホルン)



困難に對する會議が残されてゐた。こゝにおいて私は、われ々のケルンに四五個の石を積み足し、しかる後下降の途についた。」

シユレックホルンの下降路は、南西稜を過ぎてシユルツエッグ・ヒユッテに直下するものと、別にアンダーゼン・グラートと呼ぶ北西稜を辿つて、ナッシホルンに續く山稜に出るものがある。後者は更にラウター・アル・ヨッホを過ぎてオーバー・グリンデルワルト氷河に出で、グレックシユタイン・ヒユッテに達することが出来る。

れ而降路を避けるに、崩雪と墜石に細心の注意が必要であり、殊に午後の大陽熱の熾烈な時間を避けて雪面が翳つてから後に下降するに越したことはない。



像銅の一ニモヤン  
き書大筆特に史山登の、こで者勳殊の服征スアルア  
。像銅たて建にめたがんせ念記に還永を業障のトツマルバとルーユシソきべる

### ペンニン・アルプスの偉観

スイス・アルプスといふよりは、全ヨーロッパ・アルプス中で最も景観の偉大なのは、スイス、イタリアの國境を劃して聳ゆる、ペンニン・アルプスに過ぐるものはない。



高度からいへば、フランスのモン・ブラン（四、八〇七メートル）がアルプスの最高峰であるが、ペンニン・アルプスは、第二高峰モンテ・ローザ（四、六三八メートル）を初め、ドーム（四、五五四メートル）リスカム（四、五三八メートル）ワイスホルン（四、五一二メートル）および山容の魁偉と登山史上に壯烈な史實を綴つてゐる點で有名なマッターホルン（四、五〇五メートル）などの、高度においてまた登攀の至難な點からもアルプス一流の多くの峻峰を包含し、アルプスの心臟とも、またはクライマーの樂園とも呼ばれてゐる。そして登山の根據地としては、オーバーランドのグリンデルワルトに比すべく、更にそれ以上山氣分の濃厚な山村ツェルマットがある。ヴィスプで乗り替へ、ツェルマットに向ふ列車は峽谷



雪山 群の羊牧く動にか靜にろことム山の（ルトーメー二九三）タスイヴラベのスプルアンルベ。ひか山のスイウスなな靜風 動移の羊牧  
るあでか靜にうやの水くし美にげや光のそ。す照を脊の物動きべす愛なうやの物のそ謐靜と順柔と秘神のこは日の朝くや驛に河氷え映に

の斷崖を縫うて、サン・ニコラス、ランダ、テッシュなどの小驛を過ぎ、正面に方角錐形の一大岩塔——マッターホルン——がぬつと碧空に烏帽子頭を申し出したのが見えると、やがて谷は行き詰つて終驛ツェルマットの山村に着く。そして山馴れた連中——それは足許なり服装なりを見れば一眼に判る——なれば、荷物だけをホテルの馬車に積ませて、自分は驛前を南に一本しかない通りを、悠々とてくつて行く。おちつく先はいふまでもなく、ウィムバー以來山黨の集るホテル・モンテローザと定つてゐる。

ゴルネルグラートの展望臺では、ひと覗き幾らで觀光客を相手に、望遠鏡を賃貸してゐる親爺が、「ここからは四千米ートル以上の高山が十幾つ見えます。——さあ、この望遠鏡を覗いてごらん下さい。マッターホルンの頂上に人が登つて行くのが見えます。さあ今です、今です。」と客を呼んでゐる。

そんなのを横目に、山黨は直ぐゴルネル氷河に下りて、その夜はベタムプ・ヒユッテに一夜を明かし、モンテ・ローザの最高峰デユフォールスピツェを攀ぢようと、いふ計畫である。





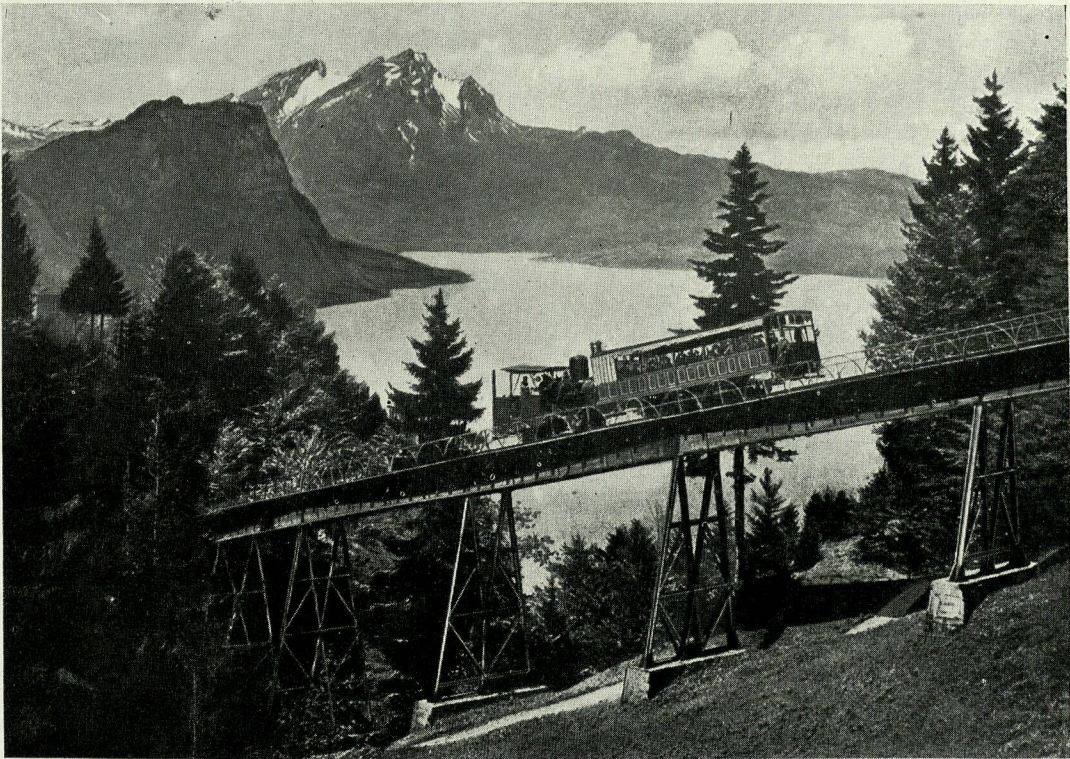


## マッターホルン の登攀

男性的な山——山の中の山——アルプス中のアルプス——マッターホルンといへば、山登る男としてその名に憧憬れ、その姿に恍惚としなれないものはないであらう。氷河を劈いて碧空にそそり立つ一大岩塔、標高四千五百メートル、その魁偉な山容は一眼仰いだだけで人々の肺腑をつらぬく壯嚴さがある。

数あるマッターホルンの記述のなかで、英國山岳會の耆宿、アルフレッド・ウィルス氏が初めてその山容を望んだときの感慨は、もつとも登山家の胸を打つものがある。

「……視線を右に轉じたとき、私は殆どこの世の存在とは思はれぬ驚異的なマッターホルンの山容を仰いで魂の戦慄を感じた。それ



ツル。い多だ甚が者山登な軽手でのいよがめ眺の觀大スプルアつかく易り登は山ギリるゆ聲にたなかの湖ンルエツル  
橋鐵の道鐵ギリ  
ろこところ渡を橋鐵の配勾急が道鐵る礪を呼湖は眞寫。ろあで名有でのいし美が色景の線沿のそは道鐵ギリるじ面に山のこら町のンルエ

は空中高く、まつたく弧立して、壯嚴なる塔狀に聳え立ち、しかも打ち見たところ聊か頭を左に傾けてゐるその格好は、ひとたび大地が搖き出せば、たちまち打ち倒れるかと、危ぶまれるほどである。千五百メートルを越える峻しい斷崖は、他のあらゆる峯々と區分して、斬然として屹立してゐる。ツェルマットから望んだその偉容は、スウイスのあらゆる山々を凌いで、最も單一なる高さを感じせしめるのである。

### ロープ祭り

マッターホルンの登路は、一八六五年にウイムバー一行が初登攀に成功した、ツェルマット・リッヅ(または北東稜)が最も容易とされてゐる。それはフルゲン氷河と、マッターホルン氷河とに削られた出稜が、夥しい堆石を運んで積み上げたと思はれる、ヘルンリの尾根を傳つて取り付くもので、ツェルマットから四時間行程でS・A・Cの小屋に達し、翌朝未明に出發すれば、頂上までは約六時間で達せられる。ツェルマットから、ヘルンリに行く途中に、シニワルツゼーと呼ぶ、小さい氷河湖の遺跡があり、その湖畔に、半ば荒廢した祠堂がある。





は息く吐。ンメーキスの隊一む進ていだしみ踏を雪清の峠カルフ。プーロス山の山は血の者若。スプルーアの雪スイスの雪 **曲進行一キス**  
 るあでのふ養を體身の鐵と魂ツープスいる明く白は葦子の雪てしくか。るどをは一キス。るすまだこに々山く巖にから高は歌ふ唄もとれ凍く白

の初めには、マッターホルンを志す登山家や、ガイドたちが、この祠堂の前に額いて「ロープ祭り」といふ祈禱を捧げる例となつてゐる。

(藤木九三)



れら見ばれけなでツッリモンサは快の種犬る走にらぐし眞てつけを雪 **犬すは思を走快**  
 るあで氣元なうやす出が飛。いの特氣にらかる見は犬な全健たつ育に雪るあでることぬ

この小祠はウイムバーがイタリアのブルーエを引揚げて、スウィス側からマッターホルンを攀ちようとしてツェルマットに来る途中、この堂内に、テントや、ロープを藏つておいたといふ縁故のある堂宇である。それが縁起をかつぐ原因になつたのか知らないが、今日でもシーズン





口入くゆでん進く深とへ奥山へ奥山てにれこ。るれらみが落村に所語てう沿に流溪。ルーメ〇三三三に實き高 峰峻のドンワルタスリク  
 〇るれは窺もとこくゆてめつり登に峰高るた々皚白にひつり登とへ境仙の奥山が々人にめたる見を出の日でれこたま。るれき解理も勢状の布分

## 聚 落

### ローン河谷の常住聚落

スイス國のローン河谷中、マルティニーから上流の状態を見ると、住民の分布を支配する諸條件は、土地の傾斜、日光の照射、溪流の最近距離、土地の高低、地質などであることが肯かれる。そしてローン氷河からマルティニーに至るローン河谷の人口は、左岸には僅に二萬人であるのに、右岸は三萬四千人に達してゐる。かくの如き差異は、右岸は左岸に比しその地貌の平夷なるため聚落の發達に適し、更に日照時間の長いためである。實際谷間の日照時間は、その谷の方向如何によつて兩者甚しく相異なるものである。今この河谷の中で、殆んど同一の地貌を有する地方即ちコンシュ郡について見ると、日向の方は三千の人口を有し、日陰の方は僅に七百乃至八百に過ぎない。そしてその溪谷が深ければ深いほど、この影響は著しいのである。また太陽に面するといふことは、その生活状態を裕にし、人口を増加するの外に、その住民の性格、文化の程度にも著しい變化を與へる。レクキゲン村の如きはその好例で、一村内でも住民は自ら二種に區分せられ、日向と日陰に在るもので、著しく異り、そしてその日陰に在る下級民において、この影響は最も顯著である。

次に低地では洪水の虞があるので人口は極めて少なく、ブリグよりサン・モリッツに至る間のローン川の汎濶地の如きは、この適例である。しかし近年堤防の修築と鐵道の建設によりて、人口は次第に増加の傾向がある。また高地に至れば、縦谷と横谷によつて、その住居の高低の位置が著しく異なる。即ち横谷における住居の位地は概して縦谷におけるよりも高地にある。一例を挙げると、ローン河左岸の縦谷にある聚落は一〇〇メートルを超えることは稀であるが、横谷に入るとアイヤン、ロ